

# 地域に愛されるブランドポークはまゆう豚

## －人材は宝－

### 有限会社ハマユウ尾鈴ポーク（養豚経営・宮崎県川南町）

#### 地域の概況

有限会社ハマユウ尾鈴ポーク（以下、「本経営」という）のある川南町は、宮崎県のほぼ中央部に位置し、東は日向灘に接している。町域は、東西約12km、南北約10kmの総面積90.12平方キロメートルで、森林と農用地が総面積のそれぞれ約40%を占め、温暖な気候



(写真1) 役職員一同集合写真

と豊かな自然の中で、畜産を中心に全国有数の食料生産基地となっている。

畜産のほか、イチゴ、トマト、キュウリ等の施設野菜や菊、スイートピー、ユリ等の花きの栽培も盛んに行われている。町の農業産出額は令和5年で約251億円、うち畜産は約183億円で全体の約73%を占めている。

#### 経営・活動の推移

##### 【共同利用から独立経営への転換】

昭和54年に尾鈴農業協同組合（現：宮崎県農業協同組合尾鈴地区本部）が民間企業の農場を取得し、地域の共同肥育農場としてJAに所属する繁殖農家150戸の子豚を受け入れていたが、施設の老朽化と子豚生産農家の減少で事業継続が困難となった。

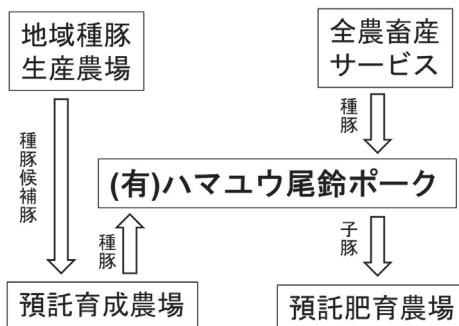
このため、地域の生産基盤の維持を目的と

(表1) 経営・活動の推移

年次	作目構成	飼養頭数	経営・活動の内容
昭和54年	養豚（肥育）	肥育7000頭規模	地域生産子豚の受入のため、JA尾鈴が共同利用施設として取得（利用農家150戸）
平成7年	養豚（肥育）	肥育7000頭規模	利用農家が高齢化により40戸まで減少。地域養豚振興のため、事業をJAから分離し、新たに養豚一貫経営の会社設立を決定
平成8年	養豚（一貫）	母豚600頭規模	（有）ハマユウ尾鈴ポーク設立（農家11戸・JA・（株）ミヤチク出資）
平成20年	養豚（一貫）	母豚1200頭規模	自社の繁殖部門拡大のため、第2農場（尾鈴繁殖農場（母豚600頭規模））建設・稼働開始
平成22年	養豚（一貫）		口蹄疫発生（15,957頭全頭殺処分）
平成23年	養豚（一貫）	母豚1200頭規模	口蹄疫からの復興、飼養管理システムの変更
平成27年	養豚（一貫）	母豚1200頭規模	自社直売所オープン
令和4年	養豚（一貫）	母豚1200頭規模	第51回日本農業賞個別経営の部で優秀賞を受賞



(写真2) 農場全体風景



(図1) 飼養フロー

して、施設運営をJAから分離し、新たに養豚一貫経営を行う会社を設立することとなり、平成8年に農家11戸、尾鈴農業協同組合、(株)ミヤチクの出資で本経営を設立し、SPF豚の一貫生産農場として再スタートを切った。

平成20年には自社での繁殖部門拡大のために母豚600頭規模の第2農場（尾鈴繁殖農場）を整備し、地域の生産基盤の強化を図るとともに、地域で生産された種豚の受入先としての役割も担っている。

平成22年の口蹄疫発生後には、経営再開が困難となっていた農家を預託農家（育成農場1件、肥育農場2件の計3件）として受け入れるなど地域養豚農家の経営継続支援も行った。

### 経営・技術の特色等

#### 【堅実かつ持続可能な経営】

平成22年に発生した口蹄疫では本経営にお

(表2) 経営実績（令和6年度）

経営の概況	労働力員数 (畜産・2000hr換算)	従業員	22.2人
	種雌豚平均飼養頭数		1,183.7頭
	肥育豚平均飼養頭数		7,816.0頭
	年間子豚出荷頭数		0頭
	年間肉豚出荷頭数		27,362頭
収益性	所得率		1.1%
	種雌豚1頭当たり生産費用		1,113,336円
繁殖	種雌豚1頭当たり年間平均分娩回数		2.38回
	1腹当たり分娩子豚頭数		14.1頭
	種雌豚1頭当たり年間分娩子豚頭数		33.5頭
	1腹当たり哺乳開始子豚頭数		11.5頭
	種雌豚1頭当たり年間哺乳開始子豚頭数		27.4頭
	1腹当たり離乳子豚頭数		10.8頭
	種雌豚1頭当たり年間離乳子豚頭数		25.6頭
	種雌豚1頭当たり年間出荷頭数(子豚)		0.0頭
	種雌豚1頭当たり年間出荷頭数(肉豚)		23.1頭
	種雌豚1頭当たり年間出荷頭数(子豚・肉豚)		23.1頭
生産性	肥育豚事故率 (離乳時からの事故率)		7.3%
	肥育開始時	日齢	72.0日
		体重	30.8kg
	肉豚出荷時	日齢	172日
		体重	114.8kg
	平均肥育日数		100.0日
	出荷肉豚1頭1日当たり増体重		0.840kg
	トータル飼料要求率		3.05
	肥育豚飼料要求率		2.68
	枝肉重量		74.3kg
肥育	販売価格	肉豚1頭当たり平均価格	44,382円
		枝肉1kg当たり平均価格	597.3円
	枝肉規格「上」以上適合率		71.6%

いても15,957頭全頭が殺処分となったが、同年11月には家畜導入に踏み切り経営を再開した。売り上げがない期間が1年半続く中、「人材は宝」という経営者の理念に基づき、従業員の解雇はせず、国の助成金を活用し全従業員の雇用を継続した。口蹄疫後の経営再開の



(写真3) 口蹄疫後に建立された畜魂碑

ため借り入れた4億3千万円の資金は、借り換えや延滞することなく令和7年度で完済となり、他に長期借入金はなく、盤石な経営基盤によって、県内でも有数の堅実かつ持続可能な経営を実現している。

#### 【バイオセキュリティの強化】

口蹄疫で無家畜となった地域全体を特定疾病（オーエスキ一病、豚繁殖・呼吸器障害症候群（PRRS））フリー地域として再出発することを目標に、平成22年8月に、養豚生産者や畜産関係者が構成員となって発足した「新生養豚プロジェクト協議会」に参加し、種豚導入基準、地域防疫組織の強化、農場環境対策等、地域ぐるみで行うバイオセキュリティ向上の仕組みづくりに大きく貢献した。プロジェクトでの協議結果を受けて、本経営のバイオセキュリティの強化に取り組み、口蹄疫の経験を決して風化させないという姿勢は地域防疫のモデルとなっている。

#### 【銘柄豚肉販売の取り組み】

本経営が生産する豚肉は「豚を健康に飼うことが美味しい豚肉につながる」をモットーに、飼料に生菌入り混合飼料を添加し、飲水には新鮮な水を用いるなど豚を健康に育てるため、こだわりを持った飼養管理が行われており、肉質・肉色も良いことに加えて、臭みがなく、うまみを感じやすいことが特徴である。

平成25年には本県ブランド豚肉である宮崎



(写真4) 宮崎ブランドポーク「はまゆう豚」



(写真5) 毎年開催されるはまゆう豚を扱ったフェア

ブランドポークの指定生産者認証を取得し、(株)ミヤチクを通して全量を販売している。

このうちの25%は平成26年から「はまゆう豚」などのプライベートブランドとして、県外へ販売している。価格条件は帯価格や付加価値価格での取引であることから、安定した収益確保につながっている。

また、販売先のスーパーで毎年「はまゆう豚フェア」を開催している。フェア期間中には役職員が店頭へ出向き販売に携わり、直接消費者の声を聞くことで仕事へのモチベーション向上につなげている。

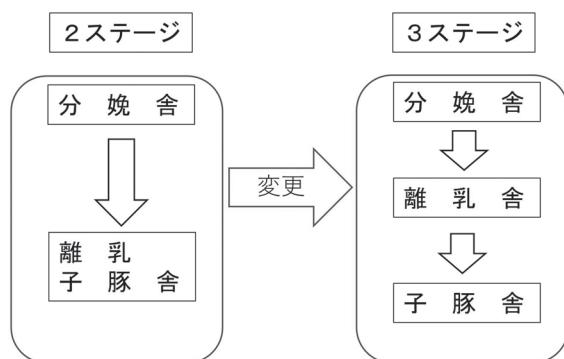
#### 【生産性向上の取り組み】

従業員の生産技術向上を目的にNOSAI宮崎に依頼し、平成23年から月に1度、管理獣医師の巡回と合わせて従業員全体でミーティングを行っている。下痢や肺炎等の疾病への的確な治療・予防法などの知見が得られるほ

か、従業員間でのコミュニケーションが図られ、これまで知る機会がなかった他部門の生産管理状況や課題等を全体で共有・検討することができ、早期の課題解決・改善につながっている。

#### 【飼養管理フローの変更】

平成23年に飼養管理フローを2ステージから現在の3ステージへ変更を行い、離乳後の事故率低減を図った。変更前は離乳子豚が豚舎の環境変化によるストレスの影響で移動後の事故率が高くなる状況が続いていたが、3ステージに変更し、保温環境を改善したことで、移動工程が1段階増えたものの、離乳後の事故率は、平成21年（口蹄疫発生前）と比べ大きく低減している。近年は5%台で安定的に推移しており、母豚1頭当たりの出荷頭数の増加に貢献している。



(図2) 飼養管理フロー

#### 【高い飼養管理技術の実証】

平成29年当時、これまで導入してきた種豚が高繁殖能力種豚に改良され、産子数が増加した一方で、虚弱子豚の増加が課題となつたため、廃豚を使った2段階里子方式を取り入れ、これを実践した。里子方式は的確な里親の選択が重要であり難易度の高い取り組みであるが、女性の分娩管理担当者が母豚の特徴を細かく把握していることが成功のポイントとなっている。



(写真6) 里子作業の様子



(写真7) 凈化処理後の放流水



(写真8) 完熟堆肥

### 地域に対する貢献

#### 【環境保全】

豚の腸内の細菌バランスを正常に保持する効果を持つ添加物により、腸内環境が改善し、ふん尿の臭気を軽減するとともに、堆肥生産の際は発酵促進剤としても働くことで、良質

な堆肥生産につながっている。生産された堆肥は成分分析を行った上で、地域の園芸農家（主に大根、スイカ）へ供給している。

また、要望に応じて堆肥散布作業を受託し、利用農家の作業負担軽減を図っている。

尿処理については、浄化処理施設（活性汚泥法）を整備し、放流水は水質検査（自主的検査を含む月2回）によるモニタリングを実施し、検査項目すべてで排水基準を満たしている。

#### 【地域雇用の貢献】

平成23年から隣接する高鍋町にある県立高鍋農業高等学校からインターンシップとして毎年約2名の生徒を受け入れるなど、養豚産業への理解醸成や職業選択の機会創出にも尽力している。

また、インターンシップ終了後も、夏休み期間中にアルバイトとして受け入れるなど、継続的に関わりを持ち、他企業が人材確保に苦慮する中でこれまでに10名もの卒業生を雇用している。

#### 【地域との関わり】

「はまゆう豚」の魅力発信や地産地消推進の一環として、平成27年に精肉直売所をオープンした。新鮮な豚肉をリーズナブルな価格で販売し、消費者から好評を得ている。

また、地域との共存共栄を目指して、お中元やお歳暮として農場周辺の地区住民（30戸）に豚肉の贈呈や、近隣小学校のイベントでの豚肉無償提供、近隣地区の催事への協賛品（豚肉等）の提供等を行っている。

地域の美化活動を目的として、地元企業約20社で構成する「川南町東地域環境保全推進会議」の事務局を務めており、町おこしイベントの1つである「都農尾鈴マラソン大会」のコースとなっている県道302号線を4キロに渡り一斉清掃を実施している。さらに、農



(写真9) 直売所の様子



(写真10) 直売所の様子



(写真11) 清掃活動の様子



(写真12) 農場周辺の美化風景

場周辺に花壇を整備し、季節の花を植栽するなど地域の環境美化に貢献している。

### 女性の活躍・働きやすい職場環境づくりの取り組み

#### 【女性の活躍】

本経営では従業員20名のうち4名が女性で、男性従業員とは異なる視点で目配りができることから女性従業員を分娩担当に配置しており、離乳頭数が増加するなど成績向上につながっている。

また、産前産後休暇・育児休暇等の導入や、子育て世代の就業時間の見直し等の就業規則を整備するとともに、女性専用の更衣室（シャワー室付き）や、衣類洗濯機・乾燥機を導入するなど、女性にも働きやすい環境整備に努めている。



(写真13) 女性専用更衣室

#### 【ワークライフバランスを考慮した労働環境づくり】

「人材は宝」という理念のもと、新規採用者は3ヵ月間の研修期間を経て、性格や業務適性を判断し配置される。配置後は、3年間の技術育成期間を設け、OJTやセミナーを活用して飼養管理に必要な技術の習得を促し人材育成に取り組んでいる。また、定期的な配置換えにより、全体作業を全従業員が把握することで、誰がどの部門に入ってもサポートできる体制づくりを構築している。役割分担表（日勤表）の作成などにより、原則週休2日の就業体系を確保することで、従業員のワークライフバランスの充実につながっている。

また、住宅手当を賃貸住宅に限らず持ち家の住居形態にも支給するなど福利厚生の充実を図っており、採用後の定着率が高く、最長勤続年数は35年である。

### 将来の方向性

#### 【今後の経営計画】

既存施設が稼働した当時に比べると、当農場の繁殖成績は格段に向上しており、また、預託肥育農場が上限収容頭数に近づいていることから、繁殖豚舎の増築（母豚100頭規模）、肥育豚舎の新設（1,800頭規模）を計画している。

最終目標としては、母豚2,000頭へ規模拡大し、継続的な地元雇用や新卒採用による雇用20名から30名への増員を目指している。